
守るために

ラティオス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
守るために

【Nコード】
N0889U

【作者名】
ラティオス

【あらすじ】
ラティオスのクルーは、地震によってつくられた津波に巻き込まれ親を失ったがそれでも妹を守るために行動する。

悲劇（前書き）

ポケモン嫌い、もしくは、ラティ兄妹が嫌いな方はご遠慮ください。

悲劇

の名称は、クルー・・・「ラティオス種」だよ。
人間で言えば7歳くらい。

今僕は近くのポケモンマーケットにいる

「ねえお兄ちゃんこれも買うの？」

そういつてきたのは妹のラティアスのティア。人間で言えば4歳くらいかな。まだとびかたも不安定だ。

クルー「うん。それも買うからカゴに入れて」

ティア「はい」

いま僕は親の頼みでおつかいに来ていた。レジで会計をすませ家に帰ろうとしたそのときだった。

ガタガタガタ・・・

棚が揺れてる？でも揺れるのはおかしい。

ゴゴゴゴゴ・・・

地震！と思ったときにはすでに遅かった。横でティアが泣いていた。

クルー「泣いてないで帰ろう？父さん達が心配だ」

と声をかけたときそのときになってすごく心配になった。

クルー「こうしちゃおられない！」

僕はティアを引っ張って、出せる限りのスピードで飛んだ。空から

見ると町は悲惨だった。

家は半分つぶれていた。僕は無理やりドアをこじ開け中へ入った。

クルー「父さん！母さん！」

父さん達は家の柱の下敷きになっていた。よくみると血が・・・。

父さん「その声はクルーか・・・？」

母さん「無事でよかった・・・」

クルー「僕もティアも無事だよ・・・」

僕は柱をどかそうとした。だが重くてびくともしない。

父さん「逃げろ・・・ティアを連れて・・・」

母さん「おまえとティア・・・が助ければ・・・それで・・・いいわ・・・」

クルー「何いつてるの父さんたちも・・・」

父さん「ティアを守れ・・・お兄ちゃんだろう・・・」

母さん「はやくいきなさい・・・」

クルー「でも・・・」

母さん「ここから西へいくと・・・コスモス村と・・・いう所に・・・」

母さん達の家がある・・・そこへいきなさ・・・い」

父さん「妹を・・・守・・・れ」

母さん「あなた達と・・・いられて・・・よかった・・・た」

ふたりとも動かなくなった。

僕は涙が止まらなかった。

ミシミシと家がきしんできた。

このままいるのは危険だ。そう思った。

クルー「ティア・・・いくよ・・・」

ティア「えっ父さん達は？」

クルー「そのことは気にするな・・・後から来るよ・・・きっと」
バキバキバキ・・・
はやくでないと！

外に出たと同時に家が崩れた。
ズズズズドーン・・・

ティア「みてお兄ちゃん大きな波！」

せまってきたのは高い波だった。あれなら余裕で巻き込まれるだろう。

クルー「ティア！」

ティア「なにお兄ちゃん？」

僕は持っていた太い縄で離れないように結んだ。

クルー「しつかり捕まってる！」

ティア「うん！」

迫ってくる大波・・・僕らは背をむけて飛び出した。

クルー「うわああああああ・・・」

ものすごい力・・・ショックで気を失ってしまった
無事に・・・ついてくれ・・・。

悲劇（後書き）

初めてです。よろしくお願いします

ティア「zzz・・・」

「・・・」

コスモス村に到着（前書き）

2話投稿です。

ティア「zzzz・ふえ？」

コスモス村に到着

クルー「う．．．ここは．．．？」

僕は浜辺に倒れていた。たしか津波に襲われて．．．！

ティアは！？そう思うと立ち上がった。いたた．．よく立てたな僕．．

ぼんやりしている目でティアを探す。

いた．．．。そこまで痛い体で歩いた。

クルー「ティア．．起きて」

ティア「う．．．ん」

よかったあ無事で。そう思いながらあたりを見回す。

「ようこそコスモス村へ！」そう書いてあった。

クルー「やったぞ！ついたんだ！」

僕はうれしさでいっぱいだった。

ティア「おなか減ったよう」

そういえばなにもたべてなかったな。

クルー「よしスーパーで買おう」

ティア「わーい！」

僕達はスーパーへむかおうとした。だが．．

クルー「さきにコンビニいかなきゃ」

父さんがくれたカード。ポケモン銀行と書いてあった。コンビニに着いた。僕はお金を下ろすことにした。

クルー「残高793万円!？」

僕はあわてて口をおさえた。

とりあえず6万円くらいおろしコンビニを出た。

ティア「ねーはやくいこうよー」

クルー「うんティアはなにかうの？」

ティア「うーんポケモンパンかな」

クルー「じゃあ僕はお寿司かな」

スーパーに着いた。まずお弁当売り場にいった。

クルー「飲み物なにを買う？」

ティア「あたしオレンジジュース!」

クルー「じゃあ僕はアップルで」

レジで会計をしているとき店員さんが「おつかいかい？」ときいてきた。急に悲しい気持ちになりなみだをこらえながら「い・・え」といった。

僕は父さんたちを思い出しティアをつれてスーパーを出て近くの原っぱについた。

クルー「父さん、母さん。僕が・・僕が非力なばかりに・・うつ・
・・」

こらえていた涙がこぼれおちた。涙をぬぐってお寿司を食べた。
横でティアがおいしそうにパンを食べている。
僕は小さな声でこういった。

クルー「妹を・・・ティアを・・・まもらなきゃ・・・」

ティアがパンを食べ終わり「いこつ」と言ってきた。

原っぱを出て30分くらい飛んだら見覚えのある家がみえてきた。

クルー「着いたよ・・・ティア」

鍵でドアをあけたらすごいことになっていた。

ティア「ゴホゴホ・・・ほこりだらけだよー」

クルー「うん・・・掃除しなくちゃ」

幸い僕達はういていたので直接ほこりに触ることはなかった。

僕達で掃除機をかけ、雑巾がけなどしたら見違えるほどにきれいになった。

クルー「やったねティア！」

ティア「うん！」

とりあえず家を探検してみることにした。

まず1階から見ていくことにした。

キッチン、バスルーム、リビング・・・変わったところはない。

続いて2階。寝室、洗面台、ゲーム部屋・・・。

ゲーム部屋にはかなりのゲームが置いてあった。ただひとつ重大なことに気がついた。

クルー「ご飯どうしよう・・・」

僕達はご飯を作ったことがない。本屋でレシピを買ってこなくてはならない。

そのレシピの材料が書いてあるからそれも買わなくては・・・。

結局買ってきたのは僕で、ティアは家でマ。オカートをやっていた。

クルー「ただいま・・・」

ティア「お帰りー」

ティア「買ってきたの？」

クルー「うん・・・」

実は帰る途中でチーマーに絡まれたとはいえなかった。

クルー「あんなにお金もってったもんな・・・」

ティア「何かあった？」

クルー「い、いや別に」

ティア「そう・・・まあいいや作ろー」

コスモス村に到着（後書き）

なんか簡単にここまで・・・

クルー「いまさら言っても仕方ないじゃん」

うんそうだね。

2人で協力して料理（前書き）

クルー「僕に料理なんてできるかなあ」
ティア「ご飯、ごはん」

2人で協力して料理

クルー「とはいってもなにを作ろうかな？」

僕は料理の本を見ながら考えた。ティアは、ス。ークのまねしてダンボールかぶって遊んでる。

クルー「うーん、野菜炒めでもつくるか」

僕は、ティアを呼んできて、一緒に作った。

テーブルには少し焦げた野菜炒めが置かれた。

僕は野菜炒めを食べながら、そういえば明日学校に行く日だったなと思った。

流石に学校に行かないと近所から変に思われるので行くことにしたのだ。

その夜僕は考えた。横でティアがかわいい寝顔ですやすやと寝ていた。

クルー「僕にティアを守りきれんだろうか」

そんなことを考えているうちに寝てしまった。

2人で協力して料理（後書き）

なんだかすごく短い・・・すみません。
クルー「たしかに」

初の学校生活（前書き）

クルー「明日はいよいよ学校かあ」
ティア「学校って楽しい？」
うーん、どうだろうな。

初の学校生活

ジリリリリリ・・・

目覚まし時計で目を覚ます。

クルー「いよいよ学校かぁ」

学校ってどんなところだろうか。

ティア「うるさいなぁ」

クルー「おきたのか」

僕は1階におりてパンを作り始めた。

2人でパンを食べて、学校という所へ行く仕度をした。そして家を出た。

飛びはじめて数分後、学校という所に着いた。

クルー「ここかなぁ」

ティア「大きい所だねー」

僕は中に入って「職員室」という場所に入った。

クルー「すみませーん・・・」

?????「君達が転校してきた、クルー君とティアちゃんだね。話は聞いてるわ。二人とも2年3組に入ってもらえる?」

2年3組ってどこだろうか。そう考えたが案外すぐ見つかった。

ティア「ここ?」

クルー「うん」

教室に入ると一人が気がついてハク「僕はリザードンのハクっていうんだ。よろしく!」

みんなが来ようとしたら先生が入ってきて、

先生「はい、皆さんは知ってると思いますが転校生のラティオスのクルー君とティアスのティアちゃんです」

こっ、こんなときはすばやく!

クルー「よっ、よろしくお願いします!」

ティア「よろしくお願いします」

先生「2人は窓際の後ろの席に並んで座って」

ふーやっと終わったよ。

そして休み時間になり、

ハク「ねえバトルしようよ」

クルー「バトル？」

僕はチーマーに絡まれたときに攻撃したことしかなかったので、バトルなんてしたことなかった。

ハク「すればわかるよ・・・いこう！」

初の学校生活（後書き）

クルー「はぁバトルかぁ」
ティア「がんばって」

初のバトル！

僕は校庭に集まっていた。話によると自分達で自作したバトルフィールドだそうだ。

バトルなんてテレビでしか見たことなかったからな・・・。

ハク「準備はいい？」

クルー「いつでもOKだよ」

ハク「いくぞ、ドラゴンクロー！」

クルー「うわっ」

すばやくよけた。だがそのあと・・・

ハク「油断するなあ！火炎放射！」

クルー「くっ・・・」

そうだ父さんから教えてもらった技を今つかえば！

ティア「お兄ちゃんガンバレー！」

クルー「くらえ！ラスターバージ！」

ハク「なにを火炎放射！」

クルー「読んでたんだ！サイコソフトオ！」

ハク「なに！うわああ・・・」

火炎放射をもろにうけてハクは倒れた

クルー「ハク！」

ハク「くっこれくらい・・・」

クルー「僕のせいで」

ハク「バトルは勝者も敗者も悪くない。これくらい当然さ」

僕は家に帰った後、家の地下室を開けてみた。

バトルのトレーニングに使うものばかりだった。

クルー「これで練習すれば強くなれる！」

僕はその日からトレーニングを始めた。

あれから5年がたった。僕は変わった。

体育の授業で、ハクとバトルしていると、ピカチュウがやってきて、
レイン「ねえ、バトルしてくれないかな？みんな埋まっちゃって・
」

僕はレインとはバトルしたことがなかったので、うんいいよ とい
ってしまった。

初のバトル！（後書き）

今回はティアの出番が少なかった気がする。

ティア「ちゃんと入れて！ヒロインなんだから・・・」

はい・・・

ピカチュウとの対戦！

レイン「いくよ・・・」

クルー「かかってこい！」

レイン「電光石火！」

はっ速い！かわしきれない！

クルー「ちっ」

当たってしまったか・・・。こっちも反撃だ！

クルー「くらえ！ギガインパクトお！」

レイン「ぐわっ」

10万ボルトがくる！

レイン「10万ボルト！」

くそ！

クルー「サイコシフトお！」

レイン「くっ！」

クルー「急上昇！」

そのまま・・・

クルー「急降下してラスターバージだあ！」

レイン「ぐわあああ・・・」

くそ！こんなに強いやつにあったのは初めてだ。動きが速い・・・。

クルー「いいバトルだったよ」

レイン「相手をしてくれてありがとう」

さてと、帰るか・・・

家に帰ったら誰もいなかった。

クルー「ティア・・・？なっ！？」

ハッサム「ちっはずしたか・・・」

クルー「だれだ！」

ハッサム「そんなことはどうでもいい・・・。おまえは死ぬのだ。」

俺が殺す・・・」

クルー「そんな簡単に殺されてたまるかよ」

ハッサム「はああああ！」

ピカチュウとの対戦！（後書き）

毎回短くてすいません・・・。
眠い・・・。

依頼書

「おの．．．れ」

ハッサムがつぶやいて倒れた。

「はあはあはあ．．．」

クルーは倒れたハッサムに近ずいた。

「おいティアを．．．妹をどこへやったあ！いわねえと殺すぞ！」

僕は力いっぱい怒鳴りつけた。そしてラスターバージで脅した。

「妹？あああのラティアスカ．．．しらねえよ」

ハッサムは力尽きる直前にいった。そしてこういった。

「おも．．．いだし．．．たぞ。たしか変．．．なやつらが連れ．．．て行つたな」

「なにに！」僕はびつくりした。ハッサムはいった。

「俺の．．．知り合いの店．．．がある．．．俺も．．．本当は．．．あんたを殺したくなかった．．．。これをた．．．よりにす．．．すめ．．．」
ガクツ。

ハッサムが死んだ。僕はくれた手紙を読んだ。それは依頼書だった。
「ここだと東に30キロくらいか．．．」

僕は、出かけることにした。それに妹の居場所がわかるかもしれない。
い。

「でもひとりだと心ぼそい．．．そうだ！」

僕は一人で叫んでしまった。だがさっそくハクに電話を掛けた。

「もしもし．．．」

ものすごく眠そうだったが僕は、話しかけた。

「ちよつと一緒に旅に来てくれないか？」

ハクは、びつくりした様子で、

「はあ？なんのために旅に出るのさ？」

といってきた。僕は、いいたくなかったがいつてしまった。

「ティアが．．．妹がさらわれた．．．」

「なにい！？まってるすぐにいってやるからな！」

10分ほどして彼は来た。そしてこういった。

「ティアちゃんがさらわれたって本当か！？」

「ああ・・・本当だよ。」

「父さん母さん・・・僕・・・守れなかったよ・・・。」

僕はつぶやいた。そして自然に涙が出てきた。

「おい実の兄のお前が泣いてどうするんだよ。」

ハクがいつてきた。

「・・・そうだな・・・こんなことしてないではやく助けに行こう。」

僕は、いこうとしたそのとき・・・

「おーいまってー」

黄色い物が走ってくる。レインだった。

「俺も連れてってくれ」

僕は、こういった。

「もちろん！」

そして旅が始まった。

依頼書（後書き）

クルー「貴様・・・ティアをなんてにしたんだ・・・」

あ・・・やば・・・目がマジだ・・・つめこええ・・・ピュ！

クルー「あ・・・にげやがった・・・まて！」

いやだ！そのつめで血祭りにされたいやだからね。

クルー「そんなことするか・・・と油断させてグサッ」

ぎゃあああ・・・どさり。

クルー「見苦しい所をお見せしました・・・まだにげるかグサッ」
ぎゃあ！

湖と鏡（前書き）

クルー「地味なタイトル・・・」
ん？なにかいった？

クルー「いついや別になんもいってないよ」
怪しい・・・

湖と鏡

まずは、ハッサムのくれた地図をみて進んだ。
ここからは湖だ。広い・・・

「飛んだほうが速いかも・・・」

僕は、つぶやいた。
ハクがいった。

「この長い距離を飛ぶのは大変だ・・・ましてや俺達14歳くらいだし」

「そんなこといっても回り道したらどれだけ大変なことかわかるだろ」

レインがいった。

「たしかにそうかも・・・でもいけるだけいってみよう」

僕は、いった。

レインは、僕の背中にとった。

「よし行こう」

飛んでいき15分ぐらいたったあとレインがなにかをみつけた。
「すごく光っている・・・なんだろう」

僕は急降下してその光っている物体の前にたった

。

「・・・鏡だ。でもなんかゆがんでいる」

僕がいったとたんレインがさげんだ。

「これ・・・あ！思い出した！ニンゲン界とポケモン界をつなぐ鏡だ！」

「ニンゲンってな・・・うわあ！」

「ど・・・どいてくれえ！」

ハクがつっこんできた。

ドガッ！

「うわああああああああああ・・・」

僕達は、鏡のなかに吸い込まれていった。

湖と鏡（後書き）

また書きます。

ニンゲン界

「・・・ここはどこ？」

目をさました僕は、あたりを見回した。

「みんながない・・・」

僕は、みんながないことに気が付いた。
僕は、テレパシーでみんなをよんでみた。

「ハクー！レインー！」

「んぐだれだい。話しかけてくるのは？」

木のしげみからレインがでてきた。

「あれ・・・ここがニンゲン界？」

そのとき寝言がきこえてきた。

「うゝんもつ食べられないゝむにゃむにゃ」

「はああきれるよまつたく」

レインがそういったあと、気持ちよさそうに寝ているハクの近くまでいって十万ボルトをかました」

「おきろおー！！」

「ふぎゃあああ！」

「お目覚めですかい？」

「さすがに今のやりすぎ……」

僕は、ちょっと同情した。だって昔は、僕もそうだったから。

「これが鏡……」

ハクの背後で渦巻きのようにまわっていた。

「さつさとかえろ……」

ハクがいかけたとたんレインがいった。

「まあもうちょっといようぜ。もしかしたらクルーの妹さんみたいなカワイイこもいるかもよ？」

「よし！いこうぜ！」

「ワンパターンだなあ……」

「ほんと……」

僕達はあきれていた。

ニンゲン界（後書き）

なるべくはやく書きますんで。

クルー「速く書くっていつ？」

んゝひまなときかな。

クルー「ひまって・・・」

人間界（前書き）

ポケモン全般にでてくるニンゲン界とはちがいます。
ご了承ください。

人間界

草陰からにぎわいの声が聞こえてきた。

「なんだろう」

僕は、いった。

「やっぱり・・・本の通りだ・・・」

レインが呟いた。

「あれが・・・ニンゲン・・・」

二足歩行で歩いている見たことない生き物だ・・・。

僕は小声でハクにいった。

「君は、大きくて目立つから鏡をみはっていて。僕とレインで探ってくるから」

僕は、ニンゲンの姿に姿を変えてレインと共にニンゲンのいる町にでた。

「こうやって歩けば、見つからないな」

僕達は、サーキットみたいな場所にでた。

するとポケモンが、4つ丸い物が下についている物体にのって走っ

ていた。

僕は、姿を消し1位になって帰ろうとしているブイゼルにテレパシ―を送った。

「いまからそこから南にある木の近くにこい」

ブイゼルは、びっくりした感じであの物体に乗った。

待つこと20分たった。膨大な音と共にあの物体がきた。

「そこにいるのはわかっている。姿をみせなよ」

ブイゼルは、物体の中から呼んだ。

僕は、姿を見せた。

「そこの君も」

レインも草むらから出てきた。

「あれっもしかして・・・レインか・・・」

物体からブイゼルがでてきた。

「もしかして・・・マークか？」

「やっぱりレインか！久しぶりだな」

「このことは、思い出したくもないんだ・・・」

「あ・・・ああごめんよ」

「実は、おまえに手伝ってもらいたいことがあるんだ・・・ニンゲン界からでてポケモン界へきても平気かい？」

レインは、いった。

「ああいいよ。ここの暮らしも飽きてきたところだし。あとこの自動車持つてつていいか？」

マークは、聞いた。

「でも鏡を通らないぞ」

レインは、いった。

「大丈夫だ。心配ない」

マークは、車内に入りボタンを押した。すぐに小さくなりミニカーサイズとなり持ちやすくなった。

僕達は、ハクの所にいった。ハクは寝てた。ただ鏡がない。

横を見ると森の中を走ってゆく二人のニンゲンがいた。

ニンゲンA「兄貴これは、骨董品屋で売れそうですぜ」

ニンゲンB「そうか。何万くらいかなあ」

僕は、狙いをつけて豆粒ぐらいの大きさになっているニンゲン達を狙撃した。

「・・・いまだ！ラスターファージ！」

紫色の束になった光が、ニンゲンに直撃した。

近づいてみると鏡の下敷きになっていた。

「速くいこうぜ」

レインの言葉でいっせいに鏡に飛び込んだ。

人間界（後書き）

つづく。

クルー「なにその終わり方・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0889u/>

守るために

2011年10月9日06時42分発行